

THE ROTARY CLUB OF CHOSHI

銚子ロータリークラブ会報

国際ロータリー第2790地区

創立 昭和32年3月23日

RI承認 昭和32年4月15日

会長 宮内 龍雄

副会長 島田 洋二郎

幹事 佐藤 直子

会計 金子 芳則

2015～2016年度 RIテーマ

世界へのプレゼントになろう

Be a gift to the world

2015～2016 RI会長 K. R. ラビンドラン

Rotary



例会日時 毎週水曜 12:30～

例会場 銚子商工会館5F大会議室

事務所 銚子市三軒町19-4

銚子商工会館内

電話 0479-25-3111(会館)

0479-23-0750(専用)

ファクス 0479-25-8789

E-mail rotary@choshinet.or.jp

URL <http://www.tcs-net.ne.jp/~crc>

第2885号(2016年2月3日発行)

今週のプログラム

「故植田 正義会員を偲んで」

信太 秀紀会員

宮内 秀章会員

前回例会報告(1月27日)

銚子RC・銚子東RC合同例会

点鐘(18:30):宮内 龍雄会長

国歌君が代斉唱

ロータリーソング:

四つのテスト



ビジター紹介:



リレイト代表

京都大学博士(教育学)

中桐 万里子様(卓話者)



米山奨学生

ピョーサンディマウン様

(銚子東RC)

会長挨拶

皆さんこんばんわ。本日は年に一度の銚子東RCと銚子RCの合同例会であります。東クラブの皆様には日頃より、公私ともに大変お世話に

なり、この場をお借りしまして、厚く御礼を申し上げます。特に東RCの藤崎会長は、年齢は私の娘婿と同年代にもかかわらず、頭脳明晰、冷静沉着であります。あと5か月足らずの任期では物足りないような気がいたします。藤崎会長のこれからの長いロータリーの中で、あと三回位は会長職が出来るのではないかと羨ましい思いが致します。

さて皆様、今日は我が佐藤直子幹事のお骨折りにより素晴らしい卓話者にお越しいたいで



居ります。何と、あの薪を背に本を読んでいる銅像で有名な、日本の倫理、道徳界のスーパースターの(お札にもなっています!)二宮尊徳先生の七代目のご子孫で在させます。京都大学博士 中桐 万里子様(卓話者)に遠路、京都より遥々ご来場いただいております。中桐様、本日は宜しくお願ひ申し上げます。最後になりますが、ロータリーは「寛容と親睦と友情に満ち溢れた人でなくてはならない」と言ったロータリー創始者のポール・ハリスが1947年1月27日に79歳



第2790地区

ガバナー 櫻木英一郎(千葉RC)

広報・会報委員会 委員長 上総 泰茂

副委員長 高瀬 幸雄 委員 阿天坊俊明・小田島國博

で亡くなられた日であります。今宵、両クラブの親睦と友情がさらに深まることをご祈念して、会長挨拶を終わります。

幹事報告

1. 確定申告用寄付金領収証についてのお願い
…公益財団法人ロータリー日本財団
2. 特別寄付金明細書郵送廃止のお知らせ
3. 確定申告用領収証の送付
…公益財団法人ロータリー米山記念奨学会
4. 2016年2月のロータリーレート
1ドル=120円
…以上、ガバナー事務所
5. 翠昂会&ローターアクト合同千葉大運動会のご案内
…地区ローターアクト代表代行藤波楓様
6. 第2回IM次年度会長スピーチ大会のご案内
(ご依頼)
…第7分区ガバナー補佐黒田幸一様
7. 創立50周年記念例会並びに祝賀会開催のご案内
…新千葉RC

【例会変更】

成田空港南RC
2月11日(木)休会(建国記念日)

卓話

「七代目が語る二宮金次郎
～激動の時代を生き抜く秘訣～」
(要約)

リレート代表
京都大学博士(教育学) 中桐 万里子様

■一歩前の足へ

昔、小学校にあった皆さんよくご存知の二宮金次郎の像。薪を背負いながら本を読んでいる姿から勤勉のイメージが強いかもしれませんが、しかし、わたしたち家族が、この像において何より重視してきたのは、金次郎像の「足」でした。つまり、その足が「一歩前へ」と踏み出されている点に注目をしてきたのです。そして、どんなときも、くじけずあきらめず、目の前の小さな一歩を前に踏み出し



てゆくことこそ、尊くかけがえのないことだというメッセージを受け取ってきました。

■実践のスタイル

しかし、それにしても実践は大変です。「どんなときも一歩前」とは、難しいことでもあります。それを可能にするための秘訣が、あの像の姿にあると捉えることができます。つまり、一歩の前こそ必要なのが「本」に象徴される「知ること」だというわけです。

まずは「本：知ること」、そして「足：実践すること」というやり方が、金次郎が生涯を通じて貫いた実践スタイルでした。

■実践の事例

そんなスタイルを実感できるような事例も、たくさん残されています。たとえば、ある年、農家にとって一年で一番大変な田植えを終えた頃、金次郎は茄子の漬物を食べて、「秋茄子の味がする」と感じます。さらに、「そういえば最近、秋に咲く野菊が咲いていたな」、「これから盛夏を迎え青々と茂るはずの植物の葉先が枯れているな」などと、他にも思いあたる変化を思い出します。このことから彼は、この夏が冷夏になることを予想し、村中を駆け回って村民を説得し、寒さに弱い稲苗を抜き、寒さに強い雑穀などへと植え替えをさせました。

この夏、金次郎の予想通り冷夏がやってきました。その年からはじまったのが、天保の大飢饉です。各地で恐ろしいほどの餓死者が出るなか、金次郎の村では、植え替えと言う対策のおかげで一人の死者も出ませんでした。彼は日頃の自然の観察から得た気づきと、実践力で村民を飢饉から救ったのです。

■敵を味方に

このエピソードは、金次郎の実践スタイルをたしかに知るものでもあります。まずは「知る・よくみる」こと。彼は自然環境を日頃からよくみて、観察することで、茄子の味や植物の変化に気づきました。だからこそ次に「実践する(つまり、対策・工夫をする)」こと。冷夏を予想したからこそ、寒さに強い苗に植え替えるという工夫をし、冷夏への備えをしたわけです。

現実には起きるさまざまなきごと(たとえば冷夏)を「困難」と捉え、「不幸の原因」としてしまうと、行動は生まれなくなります。どうしていいか、分からなくなり、立ち止まってしまうのです。けれど、それでは何も始まらない。どんななきごとにも、まずは目をつぶらずに向き合ってゆくこと。肚を決め、カクゴをして、その現実をよくみて、知ってゆく。そうすれば、かならず知恵や対策が生まれ、道がみえるはずだと考えたのが金次郎でした。

夏の寒さは、敵ではありません。工夫次第で、

その寒さを利用して作物を育てることができるのです。寒さには寒さにふさわしい実りが、暑さには暑さにふさわしい実りがあります。金次郎は、大事なのはどんなときも目の前の現実と向き合い、その現実を「活かす」方法をひねり出すことだと考えていました。冷夏という、一見すると敵になってしまうものも味方として活かすために工夫をする。ピンチをチャンスに。金次郎の実践はそのような方向を一貫してもっていました。

■知るための秘訣

このように、金次郎にとって、実践のために何より必要不可欠なのが「知る」ことだったのですが、ここには二つの秘訣がありました。

一つ目の秘訣について、金次郎は「積小為大」という造語で示します。大きな成功や実りへのヒントはかならず小さな場所にねむっている。たからの種は小さな場所にある。という意味です。これは、あの秋ナスの体験からも生まれた言葉でした。金次郎が植え替えという大きな決断をくだし、餓死者ゼロという奇跡を生み出したのは、決して才能や能力によるものではありませんでした。ナスの味や季節外れの花や植物の状態への気づき。それは農業人にとって、現場にあった小さな変化への目によってとらえられたものでした。一見、田植えなどの重要な仕事とは無関係の、どうでもいい、他愛ない、ちっぽけなことのようにもある、それら小さな異変こそが、対策の大事なヒントをくれました。金次郎は、「小さなことへのアンテナ」が知る作業における重要なカギになると主張するのです。

また二つ目の秘訣は、大人になった金次郎像にあります。実は、成人像では手に持つものが「本」から「筆と帳面」へと変化します。それは彼が、単なる知識以上に、現実・現場を自らの眼と感覚と経験によってよく観察することが重要だと考えるようになった証です。カレンダーという情報や、初夏の次は夏が来るという固定観念や、常識やマニュアル・・・それらは時にひとが現場に直接出会うことを妨げ、判断を狂わせることがあります。むしろ現場に存在している野菜の味、咲いている花、感じる風、聞こえる鳥の声などから現実を知り、ふさわしい対策を考案する。彼は、それこそが、実際的な幸福を生む道を見つけるために必要な「知り方」であり、効果的な方法だと考えたのです。

■「報徳」という合言葉

知ることを象徴する「本」から、次に行動を象徴する「一歩」へ。そのように前に進む方法を、金次郎は「報徳」と呼びました。では、「報徳」とは何でしょうか？

この用語はよく「がんばれば報われる」とか「give and take (ギブアンドテイク)」と訳され

ます。しかし金次郎は、むしろそうした発想を「見返り思想」として嫌いました。「報徳」とはむしろ、この真逆の「take and give (テイクアンドギブ)」のカタチと言えます。相手からの「take (もらうこと)」がはじまりとなり、そのうえでこちらからの「give (あげること)」が生じるという考え方は、目の前の現実の状態や様子を知る (受ける・takeする) からこそ、自身の対応を生む (実践する・giveする) ことができる・・・というわけです。

ひとは時に、ついうっかり「自分ばかりがこんなにしてあげているのに、報われない (giveばかりでtakeできない)」と感じ、疲れることがあります。しかし、それは「よくみる」ことをせず、重要な現実を見落としている証だと金次郎は考えました。一人ひとは、一体どれだけ「してもらって (takeして)」ここに存在しているのか・・・という素朴な事実です。

洋服を着ているのも、電車で移動できるのも、食事をしているのも・・・。同時代の同志たちのたくさんの汗やはたらきや人生の時間や懸命な工夫を注いでもらっているから可能なこと。あるいはそれ以前に、多くの先人や先輩たちがかけた知恵



や努力があったから可能なこと。つまり、がんばっている

のは自分だけではないということです。「よくみる」ならば、現実のあらゆるもの・できごと・ひと・・・には途方もない数のドラマや物語が宿っています。ただ見ることをやめ、あらためてよくみるなら、実は何気ない日々には多くの壁をこえる知恵やパワーが眠っているのであり、それらを受けること (takeすること) で一人ひとりの暮らしが成立しているということです。

この現実を正面から「受けとめ」、仲間を感じ、世界への希望や信頼を抱きながら、「自分はたくさんの徳 (ドラマやパワーや知恵) を受けているから、今度は自分が、その徳に報いて何かを与えたい」と発想する。そんな「恩返し思想」の方が、ひとの足をスムーズに前に出させるのではないかと考えたのが金次郎でした。そして、そうした「現実を知ること」をパワーにして (=本)、今度は対策し、実行しよう (=足)」という実践スタイルを「報徳」と名付けたわけです。

■未来へ

親、家族、先人・先輩、仲間、社会、多くの多くの存在から、育ててもらって初めてここに存在できるのが人間です。だったら今度は、受けてき

たパワーを次なる者たちへと与えてゆく（giveする）番がきたと考えたらどうでしょうか。

一人ひとりの実践は、そうやってゆっくりと未来へ向かう動きとして考えることができると金次郎は言います。だからこそ彼の「報徳」を、単なる恩返しより「恩送り」と呼ぶ方がふさわしいとおっしゃった方もあります。



誰からもらうこと、幸せを受け取ること（take）も嬉しいです。けれど、誰かに与えること、誰かを幸せにすること（give）はもっと誇らしくワクワクすることではないでしょうか。自分を犠牲にして誰かの「ために」ではなく、自分の幸せを誰かと「ともに」と発想してみる。そんな風に、自分も相手も豊かである、ハッピーな未来づくりができればと願っていたのが金次郎なのかもしれません。

懇親会



銚子東 RC
藤崎一成会長
開会挨拶



乾杯のご発声は
銚子東 RC 釜谷藤男
次年度会長



司会進行は
櫻井親睦委員長

銚子 RC 親睦委員会・有志による余興



最後に『手に手つないで』を唱和

閉会のご挨拶は
島田洋二郎次年度会長



【出席報告】 合同例会 100%

【M U】

1/31：財団補助金管理・奉仕P合同セミナー
島田君・高木君

【ニコニコ】 移動例会のためなし

次週のプログラム（2月10日）

「地区大会に参加して」

高瀬 幸雄会員

鴨志田明人会員

遠山 靖士会員

お弁当：膳（幕の内）